

『解深密経』の三無自性説について

伊 藤 秀 憲

1 はじめに——『解深密経』の三無自性説に関しては、『印仏研』23—1に、「『解深密経』における玄奘・流支の縁起理解について」と題し、生無自性性を中心として発表の予定であるが、紙幅の関係から十分な資料を掲載できなかったから、本稿ではそれを補う意味も含めて、改めて三無自性説を論じてみようと思う。論を展開する前に、訳者により三自性三無自性の訳語が異なるから、それを対照表にして示すことにする。

	玄奘訳	菩提流支訳	チベット訳
parikalpita-lakṣaṇa	遍計所執相	虚妄分別相	kun brtags paḥi mtshan ñid
paratantra-lakṣaṇa	依他起相	[他力]因縁相	gṣan gyi dbaṅ gyi mtshan ñid
pariniṣpanna-lakṣaṇa	円成実相	第一義相	yoṅs su grub paḥi mtshan ñid
lakṣaṇa-niḥsvabhāvatā	相無自性性	無自体相	mthan ñid ño bo ñid med pa ñid
utpatti-niḥsvabhāvatā	生無自性性	無生体相	skye ba ño bo ñid med pa ñid
paramārtha-niḥsvabhāvatā	勝義無自性性	第一義[諦]無[自]体相	don dam pa ño bo ñid med pa ñid

『解深密経』の三無自性説を論じるに当っては、上田義文博士の「深密解脱経と解深密経」（『大乘仏教思想の根本構造』所収）と題する論文を見落すことはできない。そこには、菩提流支訳（以下流支訳と略す）『深密解脱経』と玄奘訳『解深密経』との相違が詳しく論証されている。

2 utpatti-niḥsvabhāvatā について——両訳の相違は前掲拙論においても述べたが、相違が生じた原因は、utpatti-niḥsvabhāvatāの理解、即ち縁起 (pratītya-samutpāda) をどのように捉えるかにあると言える。それゆえ、まず三訳を示せば次のようである。

[玄]云何諸法生無自性性，謂諸法依他起相。何以故，此由依他縁力故有。非自然有。是故説名生無自性性。（正蔵16・694 a）

[流]成就第一義，何者諸法無生体相，謂諸法無体相。何以故，以彼生法依他力因縁非自

体相，是故我説無生体相。（正蔵16・670c）

[Tib.] don dam yañ dag ḥphags chos rnam^s kyi skye ba ño bo ñid med pa ñid gañ
 ṣe na/ chos rnam^s kyi gṣan gyi dbañ gi mtshan ñid gañ yin paḥo// de ciḥi
 phyir ṣe na/ ḥdi ltar de ni rkyen gṣan gyi stobs kyis byuñ ba yin gyi/ dbag
 ñid kyis ni ma yin pas deḥi phyir skye ba ño bo ñid med pa ñid ces byaḥo//
 (ed. by É. Lamotte, p.68)

玄奘訳においては生無自性性とは依他起相であり，自然有（仏教の縁起説を否定する外道の説）といった誤った観念を否定するものであって，縁起の概念を否定するものではない。一方流支訳では，因縁によって生じた法は自体の相ではないから無体であり，それが無生体相であるとしている。即ち，玄奘訳では自然有の否定により縁生の有であるという点が強調され，流支訳では縁生の法には自体が無いということに重点が置かれていると言える。玄奘訳について上田博士は『仏教思想史研究』（p.41）において，単に縁生であることを顕わしているに過ぎないとし，依他起性は有であって無とせられることはないと述べておられるが，果してそうであろうか。

本経の玄奘訳に見られるような utpatti-niḥsvabhāvatā の説明は，同じ玄奘訳ではあるが(a)『成唯識論』，(b)『顕揚聖教論』にも見られる。

(a)依次依他立生無性。此如幻事託衆縁生。無如妄執自然性故，仮説無性，非性全無。
 (正蔵31・48a)

(b)一相無性……二生無性，謂依他起自性，由此自性縁力所生，非自然生故。（正蔵31・557b）

若爾何故名生無性，謂縁力所生，非自然有故。（正蔵31・559a）

(c)『瑜伽師地論』，(d)『大乘阿毘達磨雜集論』においては，チベット訳にも同様の説明が見られる。

(c)云何生無自性性，謂一切行衆縁所生縁力故有，非自然有，是故説名生無自性性。（正蔵30・702b）

skye ba ño bo ñid med pa gañ ṣe na/ ḥdi lta ste/ ḥdu byed rnam^s ni rten ciñ ḥbrel
 par ḥbyiñ ba yin paḥi phyir rkyen gyi(s) stobs kyis skye ba yin gyi/ rañ mi skye
 ba ni skye ba ño bo ñid med ces byaḥo// (北京 No. 5539, Ḥi 18a²⁻³)

由生無自性性故，及勝義無自性性故，依他起自性説無自性，非自然有性故，非清淨所縁性故。（正蔵30・705a）

de la skye ba ño bo ñid med pa ñid dañ/ don dam pa ño bo ñid med pa ñid kyis
 ni gṣan gyi dbañ gi ño bo ñid ño bo ñid med pa yin te/ rañ mi skye ba ñid kyi
 phyir dañ/ rnam par dag paḥi dmigs pa ñid ma yin paḥi phyir ro// (Ḥi 24a⁵⁻⁶)

(d)依他起自性待衆縁故，非自然生，無自然生性故名生無性，生無性故名爲無性。（正蔵31・752a）

gṣan gyi dbañ ni rkyen la bltos paḥi phyir bdag ñid kyis ḥbyuñ ba med pa ste/

(20) 『解深密経』の三無自性説について (伊藤)

h̄dis ni rañ gi byuñ ba med pas na skye bañi ño bo ñid med pas deñi ño bo ñid med paño/ (北京 No. 5555, Śi 307a¹⁻²)

また安慧 (Sthiramati) の Trimśikāvijñapti-bhāṣya (TVB) にも次のように同様の説明がなされている。

aparaḥ punar iti paratantrasvabhāvaḥ/ na svayaṃbhāva etasya māyāvat parapraty-
ayenôtpatteḥ/ ataś ca yathā prakhyāti tathāsyôtpattir nāstīti ato'sya utpatti-niḥsva-
bhāvatēty ucyate/ (ed. by S. Lévi, p. 41)

安慧と玄奘とは異なった思想であったと言われており、その安慧が玄奘訳と同様の説明をなしているということは、玄奘訳にのみ見られる特殊な説、即ち玄奘訳を特徴づけるものではないことを示していると言えるであろう。また先にあげたように、チベット訳を含む多くの論に同様の説明がなされているということは、そのことを裏付けるものと言える。

ここで先に引用したチベット訳『解深密経』中のイタリックの部分を読せば次のようである。

他の縁の力によって生じてはいるが、それ自体としてはありえないから……

他の縁の力によって生じるということは縁生ということであり、そのことは認められるのであるが、それ自体として (svatas) 有るということは自性を認めることになるから否定される。それゆえ「それ自体としてはありえない」と言われるのであり、それは存在するものの実体性を否定すること、即ち無自性であることを表わしている。縁生であるから無自性なのであり、縁起が必ずしも有のみを表わすものではないことは理解されるであろう。

しかし、我々が依他起相を有として捉えるのは、「『成唯識論』の理解を背景にして玄奘訳を読むから」(袴谷憲昭「MS. に対する Asvabhāva 註釈の特徴」『印仏研』19-1 所収 p. 440) であろう。『成唯識論』には次のように説かれている。

依他起性有実有假, 聚生・相続・分位性故説為假有, 心心所色從縁生故為实有。(正蔵 31・47c)

依次依他立生無性, 此如幻事託衆縁生。無如妄執自然性故, 假説無性, 非性全無。(48a)

下線の部分によって依他起相を有と考えるのであろう。

縁起というのは、他に縁って生じているということであるから、その点からすれば有という意味を含んではいるが、それは実体として有るのではなく、縁生として、無自性・空として有るのである。このように、縁起という語には二つの意味が同時に含まれているのであるから、あえて両訳を異なったものとして読む必

要はないのであり、異なったものとして読み取るのは、『成唯識論』等による法相宗の伝統的解釈の影響を受けて依他起相を理解するからである。

3 **paramārtha-niḥsvabhāvatā** について——玄奘訳は二種の勝義無自性性を説く。一つは、生無自性性即ち依他起相は清浄所縁の境界ではない、勝義ではないという意味で、いま一つは、円成実相である一切諸法の法無我性は勝義であるという意味で、勝義無自性性と説かれるのである。玄奘訳では、このように、勝義ではないという意味と勝義であるという意味との、二種の勝義無自性性が説かれるのであるが、流支訳では、どちらも第一義相であって、それが第一義諦無自体相であると説かれる。一つは、因縁によって生じた法の無体であること（無生体相）が第一義相を意味しており、それは清浄観であるから第一義諦無自体相と言われるのであり、もう一つは、諸法の無我は無自体であり、これは第一義であるから第一義諦無自体相と説かれるのである。玄奘訳も流支訳も、後者の意味での **paramārtha-niḥsvabhāvatā** の内容は同じであり、両訳の相違は前者にある。それゆえ、この部分を示せば次のようである。

[玄]云何諸法勝義無自性性，謂諸法由生無自性性故，說名無自性性，即緣生法亦名勝義無自性性。何以故，於諸法中，若是清浄所縁境界，我顯示彼以為勝義無自性性。依他起相非是清浄所縁境界。是故亦說名為勝義無自性性。（694 a）

[流]成就第一義，第一義無体相者，一切諸法本無生体，是故我說一切諸法無自体相，以彼依於因縁生故，以依第一義無体相故。何以故，成就第一義，於諸法中清浄観相我說彼是第一義相。成就第一義，以他力相中清浄観故，是故我說第一義諦無自体相。（670 c）

[Tib.] don dam yañ dag ḥphags chos rnam kyī don dam pa ño bo ñid med pa ñid gañ ṣe na/ rten ciñ ḥbrel par ḥbyuñ baḥi chos gañ dag skye ba ño bo ñid med pa ñid kyis ño bo ñid med pa de dag ni don dam paḥi ño bo ñid med pa ñid kyis ño bo ñid med pa ḥañ yin no// de ciḥi phyir ṣe na/ don dañ yañ dag ḥphags chos rnam la rnam par dag paḥi dmigs pa gañ yin pa de ni ñas don dam pa yin par yoñs su bstan la/ gṣan gyi dbañ gi mtshan ñid de ni rnam par dag paḥi dmigs pa ma yin pas deḥi phyir don dam paḥi ño bo ñid med pa ñid ces byaḥo// (p. 68)

この相違は **utpatti-niḥsvabhāvatā** からの相違に起因している。流支訳において無生体相と言っても、玄奘訳のように依他起相を意味するものではなく、第一義相を表わしているなのであり、それは縁起を第一義の立場より、無自性・空とみているからである。この点を上田博士は、「これは竜樹における縁生の無自性が空であり空は諸法実相の異名にすぎないという思想を真直ぐに受けているものである」（『大乘仏教思想の根本構造』p. 199）と指摘されている。このことは他の箇所にも

おいても見られる。

[玄]我為彼故，依生無自性性，宣說諸法。(694 c)

[流]我為彼說諸法不生。(671 b)

[Tib.] de dag la ni ña *skye ba ño bo ñid med pa ñid* las brtsams nas chos ston te/
(p. 71)

[玄]若即分別所行遍計所執相所依行相，是名依他起相。世尊依此，施設諸法生無自性性，
及一分勝義無自性性。(696 b)

[流]世尊，彼分別境界，依彼分別境界行相，是他力相。是故如來，依於彼法，而說諸法不生諸法無體，亦依彼法，說第一義無體相。(673 a)

[Tib.] rnam par rtog pañi spyod yul kun brtags pañi mtshan ñid kyi gnas hdu byed
kyi mtshan ma gañ lags pa de ni gšan gyi dbaṅ gi mtshan ñid lags te/ de la
brten nas bcom ldan h̄das chos rnam kyi *skye ba ño bo ñid ma mchis pa ñid*
dañ/ don dam pa ño bo ñid ma mchis pa de ñid las gcig kyañ h̄dogs par mdzad
lags so// (p. 81)

玄奘訳の「生無自性性」，チベット訳の“*skye ba ño bo ñid med (or ma mchis) pa ñid*” に対応する箇所が，流支訳では「諸法不生」或は「諸法不生諸法無體」となっている。不生という語で思い出されるのは『中論』の八不の偈であるが，因縁によって生じた法は実体がないから無體(無自性)であり，無體であるから不生なのであり，これは『中論』で説くところと一致する。

しかし，このような説とても決して法相宗にて説かれなかったものではない。

『成唯識論述記』では，

……即縁生法亦名勝義無自性性，於諸法中若是清淨所縁境，我顯彼為勝義無性。依他起相亦是清淨所縁境界故，亦說為勝義無性。無漏後得真智名勝，亦縁此依他為境故，此依他亦名清淨所縁。勝之義故。(正藏43・554 c-555 a)

としており，依他起の法も，後得真智という第一義の立場より見られているのであるから清淨であると言われるのであり，流支訳において因縁相は雜染であるが，第一義相であり清淨であるとされるのは，縁起を無自性・空という第一義の立場から見た場合に言われるのである。ここに引用したような理解が法相宗において見られるということは，流支訳のような理解を決してしなかったのではないことを示すものであると言えよう。

4 譬喩について——經は三無自性の説明の後，三つの譬喩を用いて更に説かれる。ここにおいても両訳は相違しているから，その点について触れておくことにする。經文は次のようであり，チベット訳の内容は玄奘訳に一致するから省略する。

i) [玄] 善男子，譬如空花相無自性性当知亦爾。

[流] 成就第一義，如空中華無自体相，一切諸法無自体相亦復如是。是故我說一切諸法無自体相法應如是應知。

ii) [玄] 譬如幻像生無自性性当知亦爾。一分勝義無自性性当知亦爾。

[流] 成就第一義，譬如幻作種種色像，諸因緣法無自体相亦復如是。是故我說一切諸法無自体相。成就第一義，第一義諦無自体相亦復如是，是故我說第一義諦無自体相。

iii) [玄] 譬如虚空惟是衆色無性所顯遍一切処，一分勝義無自性性当知亦爾。法無我性之所顯故，遍一切故。(694 a-b)

[流] 成就第一義，如空中華色無体相得名，如是第一義諦無自体相亦復如是。(670 c-671 a)

i) に関しては両訳の相違は見られないが，ii) において，玄奘訳は幻像の喩によって生無自性性を説き，それがまた「一分の勝義無自性性」であるとしている。先に述べたように，玄奘訳では，勝義ではないという意味と勝義であるという意味の，二種の勝義無自性性が説かれるのであるが，この点を「一分」という語が適確に示していると言える。流支訳の「諸因緣法無自体相」とは，*utpatti-
niḥsvabhāvatā* のところで引用した部分 (p. 169) にある「彼生法他力因緣非自体相」ということであろう。そして，それが一切諸法無自体相であり，第一義諦無自体相なのであって，譬喩の部分も流支訳の特徴をよく表わしている。

iii) では，玄奘訳は虚空の喩を用いているが，流支訳は i) の無自体相の場合と同じ空中華の喩となっている。ここでも空中華は虚妄分別相の喩と見るべきであろう。空中華には実体がないように，虚妄分別相である我も当然自体がないということ，すなわち諸法無我ということはこの喩は意味している。存在するもの（色）は，実体がなく無体相によっているという意味で，一切法無自体相（これは譬喩の部分には欠けている）と名づけられる。そしてそれが第一義諦無自体相なのである。

以上のように，これらの譬喩は，これまで論じてきたことと密接な関係にあるのであり，両訳の特徴をそれぞれよく表わしていると言えるが，譬喩の用い方は，玄奘訳の方が，その当時の，三無自性を説く場合のより一般的な用い方ではないかと考えるのである。なぜならば，三無自性を説くのに，空花・幻像・虚空の喩を用いるのは，玄奘訳のみに見られるものではなく，安慧の TVB (p. 41) にもこの三つの譬喩が用いられているからである。

5 おわりに——以上のことから，両訳の相違は縁起をどのように捉えるかに

(24) 『解深密経』の三無自性説について(伊藤)

よるものであり、縁起という語には、他に縁って生じているから有るという意味と、無自性・空という意味とが含まれているということが理解されるならば、玄奘訳と流支訳とをあえて異なったものとして読む必要はないであろう。我々がこれを異なったものとして見るのは、玄奘訳を法相宗の伝統的解釈によって理解しようとするからである^註。また、三無自性が譬喩をもって説明されており、そこにおいても譬喩の用いられ方に相違があるが、それは縁起の理解の相違によって生じたものであって、空花・幻像・虚空の喩は、安慧のTVBにも見られるものであることから、決して玄奘訳のみに見られるものではない。これらのことから考えるに、流支訳は縁起の無自性・空という点を強調して訳したものであるが、玄奘訳に見られる三無自性説、或は譬喩、またチベット訳のもつ直訳的であるという性格から言っても、玄奘訳チベット訳の方がむしろ原典に忠実であると言えるのではなかろうか。流支訳は、竜樹以来の縁起は無自性・空であるという思想をより明確に伝えんがために、原点に忠実であるよりも、彼の思想を含んだ意識がなされたものと思われる。

(1974・9・16)

(註)拙論「本質の原語について」(『印仏研』21-1所収)も、同じ観点から論じたものであって、本質という語を我々が伝統的解釈によって理解するから、サンスクリットへの還元の際して誤りを生じるのである。